

## 変更前のCシナリオ

## &lt;太陽光発電&gt;

- ・ 今すぐにも取り組める対策 ⇒ 屋根置きを中心とした太陽光発電を最大限導入

## &lt;森林吸収源対策&gt;

- ・ 経営面積の減少等に伴う吸収量の減 ⇒ 追加的な対策の実施 約50%程度の回復

## &lt;ご意見&gt;

- ・ 太陽光発電は、冬期間の発電が望めない、パネル破損リスクが高い  
⇒ 今後も普及が望めないのではないか…。
- ・ 特徴を生かした取り組みで、**大野らしさ**を  
⇒ 県No1（面積・経営面積）の広大な森林を生かすポテンシャルがあるのでは…。

## &lt;市調査&gt;

- ・ 公共施設における太陽光発電導入（屋根置き）シミュレーションを実施  
⇒ 冬期間の発電効率低下や積雪対策のため費用対効果が低く投資回収困難施設が少なくない

## 変更後のCシナリオ

## &lt;森林吸収源対策&gt;

- ・ 担い手不足や所有者の山離れなど課題は山積しているが、**林業振興対策含めた森林吸収源対策に注力し、吸収量の現状維持を目指す** ⇒ 雇用維持拡大、森林保全等の効果も期待

## &lt;太陽光発電&gt;

- ・ 雪国では、積極的に取り組むことのできる条件がまだ整っていない  
⇒ 投資回収のできる事例や防災対策など他効果が望める事例を中心に取り組み、経済的効果の低い投資を避ける

# 変更前と変更後の比較

## ■概要

シナリオ	シナリオの概要
C 先導シナリオ 変更前	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国より先導して、2050年を待たずにカーボンニュートラルを目指す</li> <li>・森林吸収源対策を追加実施することで森林吸収量を増やす</li> <li>・再エネの追加導入で実質排出量も可能な限りゼロ（排出量＝再エネ導入量）を目指す</li> </ul>
C 先導シナリオ 変更後	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国より先導して、2050年を待たずにカーボンニュートラルを目指す</li> <li>・豊富な森林資源を最大限活用し、既存木質バイオマス発電を軸にした森林吸収源対策に注力することで、森林吸収量の現状維持を目指す</li> <li>・再エネは、森林吸収量の維持（なりゆきシナリオ比較では増加）分を踏まえ、投資額（市民・事業者負担）の軽減を図る</li> </ul>

## ■実現可能性・評価

シナリオ	再エネ導入目標	CO2実質排出量	初期投資(円)	エネルギー収支(円)		実現可能性・評価
				単年(2050)	累積(30年間)	
変更前	▲56千トンのポテンシャル 22%	▲62千トンのうち森林吸収分 (▲114.7千トン)	167.8億	▲17億	▲1,479億	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一般住宅への太陽光発電設備の設置など市民の負担も大きい</li> <li>・市民、市内事業者との連携</li> <li>・再エネの地産地消確立などによる再エネ導入の経済効果等の市民らへの還元が課題</li> <li>・再エネ関連産業の育成が期待できる</li> </ul>
変更後	▲36千トンのポテンシャル 15%	▲81千トンのうち森林吸収分 (▲150.4千トン)	80.0億	▲23億	▲1,613億	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森林吸収源対策として林業振興が必須 ⇒雇用創出や森林の多面的機能維持が期待できる</li> <li>・既存再エネの地産地消体制の確立が課題 ⇒新たな再エネ導入による市民事業者の負担軽減</li> <li>・実質排出量のマイナス分は、カーボンオフセットなどで経済的活用</li> </ul>